

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32695

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13673

研究課題名（和文）沖縄の被爆者調査 証言収集と記録化

研究課題名（英文）Revisiting the issues of A-bomb survivors in Okinawa

研究代表者

桐谷 多恵子 (KIRIYA, Taeko)

多摩大学・グローバルスタディーズ学部・専任講師

研究者番号：30625372

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、沖縄の被爆者の人びとに対して被爆体験とその後の自分史について聞き取り調査を行うとともに、それらの証言を収集し、記録として残す作業に取り組んだ。以上のような作業を通して、沖縄の地域特性の中での被爆者の姿を学術的な研究として提示することを目標とした。具体的には、沖縄において被爆者や被爆関係者への聞き取り調査を行った。同時に、国内で可能な限り、沖縄の被爆者に関わる史料を収集を行った。また、史料情報が十分ではない沖縄の被爆者をめぐる史料について、発掘と所在の確認、位置づけを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、（1）沖縄の被爆者の聞き取り調査、（2）沖縄の被爆者に関する史料調査を行った。沖縄の被爆者や被爆関係者への聞き取り調査は、彼ら/彼女らが高齢化していくために一刻を争う状況にある。被爆者の方の体調不良により聞き取り調査が直前でキャンセルとなる事があった。一方で被爆者の方が「話しておきたい」と積極的に自分史を語ってくださる事例もあった。沖縄の被爆者の証言記録は少ないため、聞き取り調査を通して得られる新たな知見は貴重である。証言の収集とその記録化は生存者のご存命である現時点での重要な課題である。本研究では、聞き取り調査を優先的に行い、インタビューを記録として残し、論文の発表に取り組んだ。

研究成果の概要（英文）："Okinawa Hibakushas" are atomic bomb survivors who returned to Okinawa after experiencing the bombing either in Hiroshima or Nagasaki. Okinawa Hibakushas have a different history from that of Hibakushas in the mainland of Japan. Okinawa Hibakushas had been neglected by the Japanese government for about 20 years. The objective of this research was to reorganize the testimonies from interviews with Okinawa Hibakushas and reconsider the value of those testimonies. Main findings from the interviews with Okinawa Hibakushas were summarized into two points. First, they criticized not only the atomic bombing but also war and military violence as whole concept of violence. Second, the lawsuit brought by Okinawa Hibakushas played a significant role as a pioneer in the activities by Hibakushas living outside of Japan. It was extraordinary that those who were under control by the US fought against them when Hibakushas in the mainland were still struggling to obtain rights.

研究分野：国際文化学

キーワード：沖縄 核兵器 被爆者 琉球政府 沖縄戦 戦争体験の継承 戦後日本

1. 研究開始当初の背景

「沖縄の被爆者」とは、広島・長崎で原子爆弾により被爆し、郷里の沖縄に戻った人びとのことを指す。戦後、沖縄はアメリカの直接統治の下でアジアの「核の拠点」とされ、約 1300 発の核兵器が配備されていたと言われる。その中で戦後、沖縄の被爆者たちは、およそ 20 年にわたり放置されてきた。それでは、沖縄の被爆者は、どのような戦後史を歩んできたのか。沖縄の被爆者については、広島と長崎の被爆者調査と比べ研究が非常に少ない状況にある。筆者の調べた限りでは、著書として出されているものは、福地曠昭によって書かれた『沖縄の被爆者 癒されぬ 36 年の日々』が 1981 年に刊行されている。しかし、福地の著書以降、沖縄の被爆者をテーマとした単著は刊行されておらず、研究上での発展が必要なテーマといえる。単著以外で沖縄の被爆者調査に関する先行研究は、長岡弘芳「沖縄在住被爆者の報告--その実情二例を中心に (原爆の思想(特集))」(思想の科学 第 5 次 (91), 1969 年)が存在する。長岡は、広島の被爆者に聞き取り調査で得た視座を軸にした分析を行っており、「沖縄在住被爆者」という問題の所在に関して極めて有益な先行研究である。しかしながら、わずか 2 例の分析に留まっているため、沖縄の被爆者の傾向として位置付けるには実例が足りない。可能な限り沖縄の被爆者への聞き取り調査を行い、総合的に分析が取り込まれるべきテーマである。長岡の論考以降は沖縄の被爆者を調査の対象とした報告や論文の業績にたどり着けず、国立国会図書館で先行研究を検索しても、研究としては体系的に取り込まれてきたという業績は出てこない。以上のように研究的空白ともいえる状況が長年続いたテーマといえる。一方で、先行研究とは別に、ジャーナリストがこの分野において取り組んできた業績を見逃してはならない。広島の地方紙の中国新聞の記者であった大牟田稔(1930 ~ 2001)は、広島大学を卒業後、中国新聞社に入社し、以後一貫して被爆問題に取り組んできた。大牟田は、当時、米国の軍政下にあった 1964 年 8 月に沖縄に渡り、19 人の被爆者を取材している。その現状を「沖縄の被爆者たち」と題して中国新聞に連載している。この記事は反響を呼び、広島の医師が沖縄の医師と連絡を取り合う契機となり、やがて日本政府と琉球政府が沖縄において被爆者の調査や健診を行うきっかけともなった。しかし、その成果が単著の刊行へと結びつくことはなかった。以上のような「沖縄の被爆者」の研究や報道に関する状況において、調査を集中的、且つ継続的に行う必要性があった。

2. 研究の目的

本研究課題は、「沖縄の被爆者調査 証言収集と記録化」として、沖縄の被爆者に対して、被爆体験とその後の自分史についての証言を収集し、記録として残す作業を通して、沖縄の地域特性の中での被爆者の姿を学術的な研究として提示することを目的とした。本研究での新しい視座は、広島と長崎の被爆者と沖縄の被爆者の戦後史を比較と関係の視点から検証することにある。更に、資料の収集が十分ではない沖縄の被爆者資料の発掘と所在を確認し、沖縄独自の地域性を踏まえて分析を行い、その成果を研究論文として刊行することを研究成果の目標と設定した。

3. 研究の方法

本研究では、まず当事者である沖縄の被爆者の証言を収集し、その証言を記録として残すことに取り組んだ。そして、現在という時空間に生きる「沖縄の被爆者」の存在を(断片的にならざるを得ないが)描き出すことに努め、次いで、その証言の意味を考察することに取り組んだ。つまり、本研究は聞き取り調査と資料分析を中心とした沖縄の被爆者調査である。中心的な作業は、沖縄県内の公文書館等所蔵の資料分析、沖縄の被爆者への聞き取り調査である。研究調査は次の 3 つの柱からなり、順を追って実施した。(1) 沖縄の被爆者の聞き取り調査、(2) 沖縄の被爆者の資料調査、(3) 研究の成果として、所属学会において研究報告を行い、研究論文の発表。以上の研究目的を軸に、先行研究を調べ、研究史における本研究の位置づけを行った。その上で研究計画を具体的に作成した。また、聞き取り調査や資料調査でご協力いただく機関への調査依頼を改めて行った。「『沖縄の被爆者調査』に関する研究(調査)へのご協力をお願い」を作成し、沖縄県原爆被爆者協議会、沖縄平和運動センター、沖縄県保健医療部へ送付した。その結果、それぞれの機関から調査協力についてご快諾をいただいた。その後、沖縄での聞き取り調査ならびに史料調査を開始した。聞き取り調査に際し、被爆の体験や戦争の記憶について、更には彼ら/彼女らの家族の歴史を聞くために、被爆者との信頼関係の構築が必要であった。そこで、沖縄の被爆者の方々への聞き取り調査を本格的に開始するにあたり、研究の目的や意義を説明する

ことから始めた。その際に、これまでの自身の研究成果(広島や長崎での被爆者への聞き取り調査)を参考にしながら調査に取り組んだ。新しい研究のフィールドに挑戦する時は多くの困難を伴う。しかし、研究を順調に開始することができたのは、ひとえに沖縄県原爆被爆者協議会の調査へのご協力を他ならない。聞き取り調査を開始して改めて思ったことは、沖縄独自の文化、特に言語(ウチナーグチ)をしっかりと学んでおく必要があるという点である。広島と長崎の被爆者への聞き取り調査においても地域に根差した言葉の大切さを実感したことがあった。言語は記憶を想起する際に極めて重要なものである。また、「本土」や「ヤマト」との文化が異なっている点も沖縄被爆者の証言の中でいくつか言及があった。原爆が落とされてからの話にとどまらずに、沖縄や琉球の歴史、言語、文化については学んでいく必要があった。改めてこの点を確認し、研究調査に取り組んだ。

4. 研究成果

研究期間を通して、沖縄県原爆被爆者協議会のご協力により、沖縄の被爆者の方々への聞き取り調査をスムーズに始めることができた。また、図書館や公文書館への資料調査はもちろんのこと、沖縄の被爆者の方が個人的に所蔵している史料も調査させていただくという有意義な機会を頂戴した。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、予定していた沖縄での資料調査、並びに沖縄の被爆者への聞き取り調査を実施することが極めて困難な状況に陥った。コロナ禍においても可能な限り聞き取り調査及び資料調査を行い、以下の研究成果に至った。(1) 沖縄県原爆被爆者協議会と沖縄県保健医療部のご協力の下、沖縄の被爆者の方々へのアンケート調査と聞き取り調査を実施することができた。アンケート調査票については沖縄県原爆被爆者協議会の伊江和夫前理事長に確認いただき、アドバイスをもとに加筆修正を行い、完成版となった。アンケート調査を進める中で沖縄の被爆者の問題に関して、考察を深めることができた。(2) 日本国際文化学会第18回全国大会(於:長崎大学)において「沖縄の被爆者調査を通じて見える文化の問題 - 核時代における新しい文化創造への一考察」と題して学会報告を行った。沖縄の被爆者の方が聞き取り調査の際に、「沖縄の問題を文化の問題として考えて欲しい」と証言されたため、その証言へ自分なりに応答するために報告を行った。琉球王国、沖縄県、琉球政府、再び沖縄県へと時の権力により弾圧を受けた沖縄の人びとのアイデンティティについて考える必要があるという課題を得た。(3) これまでの聞き取り調査と資料調査をもとに論文を執筆し、日本平和学会編『平和研究 第54号』に「沖縄の被爆者問題の再考察 現代における証言の意味」と題した論文を発表することができた。(4) 2020年度、日本平和学会の秋季研究集会の部会5『原爆被害』の語りを再考する <語られないもの>という視点から」において「いま、沖縄の被爆者が伝えたいことは何か」と題して報告を行った。本報告では、本土ではあまり語られることのなかった沖縄の被爆者の戦後史について、現代において沖縄の被爆者が何を伝えたいと思っているのかという点に着目し、報告を行った。考察では、沖縄戦に焦点があたるなかで、被爆者が声をあげることを控えざるを得なかった状況、今につながる米軍基地の問題などの複雑な様相が浮かび上がった。沖縄の被爆者が今一番発信したいメッセージは自分たちの体験や経験を継承していく人びとの育成であるとし、筆者ができることは本土においてこの課題に参加していくことであると結論づけた。(5) コロナ禍において、予定通りに沖縄での聞き取り調査を実施することができない状況の中、資料調査と文献調査に取り組んだ。その中で、沖縄の被爆者問題を考察する上で重要な沖縄史について考察することにも取り組むこととなった。戦後沖縄が核基地であったことを考慮して考えることの必要性や沖縄の基地問題についても考察する必要性を確認した。

(6) 沖縄県原爆被爆者協議会のご協力の下、コロナの感染者数が一時落ち着いたと思われた時期に一度、沖縄の被爆者の方々へのアンケート調査と聞き取り調査を実施することができた。アンケート調査と聞き取り調査を進める中で、沖縄被爆者の戦後史について考察を深めることができた。本研究では、沖縄において被爆者や被爆関係者への聞き取り調査を行い、記録として残す作業、ならびに資料調査に取り組んできた。本研究の成果概要は以上である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 桐谷多恵子	4. 巻 42
2. 論文標題 「切明千枝子さんの思想とその個人史的背景－講演をより深く読み込むために－」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長崎総合科学大学 長崎平和文化研究所 『平和研究』	6. 最初と最後の頁 35 - 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐谷多恵子	4. 巻 15
2. 論文標題 誰の視点から復興を描くのか－被爆者が語る 私たちの復興 から広島「復興」を捉え返す試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本災害復興学会論文集	6. 最初と最後の頁 129 - 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐谷多恵子	4. 巻 第54号
2. 論文標題 「沖縄の被爆者問題の再考察 現代における証言の意味」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 平和研究	6. 最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桐谷多恵子	4. 巻 18
2. 論文標題 浦上の「受難」と「復興」における文化の存続 キリスト教修道士・岩永富一郎の活動を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 インターカルチュラル	6. 最初と最後の頁 63-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桐谷多恵子
2. 発表標題 いま、沖縄の被爆者が伝えたいことは何か
3. 学会等名 日本平和学会秋季研究集会、部会5（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 桐谷多恵子
2. 発表標題 沖縄の被爆者調査を通じて見える文化の問題 - - 核時代における新しい文化創造への一考察
3. 学会等名 日本国際文化学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桐谷多恵子
2. 発表標題 あらためて わたし から「ヒロシマ・ナガサキ」を辿り直す試み 平和都市ヒロシマ / 国際文化都市ナガサキの掛け声との間で
3. 学会等名 日本国際文化学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桐谷多恵子
2. 発表標題 広島・長崎の戦後史 「被爆」と「復興」
3. 学会等名 日本災害復興学会設立10周年記念企画「復興とは何かを考える」連続ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桐谷多恵子
2. 発表標題 「戦後長崎における被爆の痕跡と復興 1940年代、50年代を中心に 」
3. 学会等名 核兵器廃絶長崎連絡協議会主催、平成29年度・核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界を目指して」（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本平和学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 189
3. 書名 『戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー』	

1. 著者名 林田幸広、土屋明広、小佐井良太、宇都義和編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 302
3. 書名 『作動する法/社会 パラドクスからの展開』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鈴木達治郎編『核兵器禁止条約採択の意義と課題』RECNA Policy Paper, 6, 2017 http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/37700/1/REC-PP-06.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------